

抜群に住みやすいまち・西都

はしだ かずみ
さいと
西都市長(宮崎県) 橋田和実



菜の花畑に囲まれた西都原古墳群

宮崎県のほぼ中央に位置する西都市は、面積が438・79km²あり、うち森林面積が市域の約75%を占めています。人口約2万8000人が居住しており、月平均気温17・4℃と温暖で恵まれた環境を生かし、ピーマンやマンゴーといった施設園芸のほか、露地作物、畜産など農業の盛んなまちで、プロ野球やJリーグチームのキャンプ地にもなっています。

また、本市には16世紀に日本人で初めてヨーロッパに渡つたとされる天正遣欧少年使節団の伊東満所まんしょの生誕地である都於郡城とのおりじょう址や、平成30年度に日本遺産に認定された特別史跡「西都原古墳群」があります。古墳の数は300基余りと日本最大級の数を誇り、宮内庁の御陵墓参考地に治定されてい

る2基の古墳(男狭穂塚おさほづか、女狭穂塚めさほづか)は日本有数の大きさです。

毎年11月初旬には、御陵墓前を会場に、日本書紀に記されたニニギノミコトとコノハナサクヤヒメの恋物語を再現した「西都古墳まつり」が開催され、ちょうどその頃は、会場周辺に約300万本のコスモスが咲き誇り、とてもきれいです。西都原には春、夏、秋を通して、サクラ、菜の花、ヒマワリ、コスモスが一面に咲き誇り、県内外からたくさんのお客様が訪れています。

口蹄疫との闘い

市長となり2期目の平成22年4月に、宮崎県で家畜伝染病の口蹄疫こうていえきが10年ぶりに発生しました。前回の口蹄疫とは異なり初動が遅れてしまい、口蹄疫が拡大したことで、本市と隣接する自治体を中心に29万7808頭の家畜が殺処分・埋却されました。私も現地対策本部長として指揮を執るとともに、現場での作業にも従事しました。私は、若い時に(社)宮崎県家畜登録

協会で作事をしており、家畜、特に牛には強い思い入れがあったため、本当に衝撃的な出来事でした。

特に感染が県全域、九州全域に拡大しないよう家畜にワクチンを接種することになった時は、家族の一員である家畜に殺処分を前提としたワクチンを打つことになか



口蹄疫で埋却処分した家畜への献花

なか納得していただけない農家の方もおり、また、接種する獣医師の方も家畜を生かすためのワクチンでないことに複雑な思いでした。早期終息を願いながら心身共に大変な思いをして皆さんが作業に携わっており、日を追うごとに疲弊しているのを感じていました。

追い打ちをかけるように、非常事態宣言が発令されると、地域経済が落ち込んでいき、街の活気がなくなっていました。その後、8月27日に当時の東国原県知事が終息宣言するまでは、とても苦しい4カ月間でした。



ラモス瑠偉元選手とのサッカー試合

あの苦難から今年で14年がたとうとしており、発生によって落ち込んでいた畜産業も「忘れない、そして前へ」を合言葉に、復興の道を力強く歩んでおり、牛、豚の飼養頭数も発生前の水準にほぼ回復を遂げることができました。

サッカーよ、ありがとう！

私は、昔から身体を動かすのが大好きな気質で、特に、「サッカー」が大好きです。私が子どもの頃は、今ほどサッカーが国内でメジャーな競技ではありませんでした。しかし、他のスポーツにはない『1点の重み』があり、拮抗した展開の中で、ようやく点が入ったときに選手はもちろんベンチも、観客もみんな大歓声を上げて喜ぶ瞬間

がたまらなく大好きで、中学校で始めたサッカーは、高校、大学、そして就職後も続けました。さらには60歳の時は、「ねんりんピック」に選手として出場できました。

40代の県議だった頃には、県サッカー協会の副会長となり、日韓ワールドカップの宮崎キャンプ誘致団長としてドイツ、スウェーデンを誘致することができました。この大会でドイツが準優勝した時は本当にうれしかったです。また、2国の歓迎

レセプションで、選手たちに完熟マンゴーや宮崎牛を提供すると、あまりのおいしさに喜んで何度もお代わりをしていた姿は良い思い出です。52歳からは会長となり、九州で唯一Jリーグがなかった宮崎県にチームを設立させようと16年間奮闘し、3年前によくJ3リーグのチーム「テゲバジャーロ宮崎」が誕生し、県民に愛されるチームへと育っています。

これまでのサッカー人生を通して、体力、気力を養い、さらに幅広い人脈を培うことができたと思います。サッカーの神様に「ありがとう」という気持ちでいっぱいです。

人生開拓、為せば成る

私のこれまでの71年間は七転び八起きの人生でした。苦難や挫折を幾度となく経験し、その都度、「苦難は天が与えた試練」と自分に言い聞かせ、「人生開拓、為せば成る」を座右の銘として生きてきました。これまで、中学生の時の生徒会長を皮切りに、県議を2期、市長は通算4期目となりましたが、そのうち、3回は落選してしまいました。ただ、その後に必ず這い上がってきました。倒れても這い上がるために、常に周囲の方への感謝の気持ちを忘れないように



40歳ごろに挑戦した日本舞踊



当たり前となった軽トラック出勤

しており、毎朝4時に起床し、仏壇に向かって、家族、親戚、知人が今日も元気な生活できていることに感謝しています。そのおかげか、大きな病気もせず、今日に至っています。これからも、周囲への感謝と報恩の気持ちを忘れずに人生を開拓してまいりたいと思います。